

認知症と共生する社会へ向けて ⑧

岸田総理を議長として行われた「認知症と向き合う幸齢社会実現会議」で議論された、「本人主体で認知症と共生する」「本人の尊厳を守り希望を実現する」という具体的なイメージについて、前回から一つの事例をお話ししています。80歳代後半の一人暮らしの女性Sさんは、既に亡くなった夫を毎日探し回り、かなり認知症は進行していると言えますが、その一方で道に迷うことはなく、日常的な金銭管理や買い物は何とかできている状況です。しかし、既に「要介護1」の介護認定を受けているにもかかわらず、介護ヘルパーの関与は断固拒否して、ひとり暮らしを続けています。



遠方に住む長男と長女は2人とも子育てと仕事が忙しく、周囲から「お母さん、おひとり暮らししているなんて、心配ね」「施設に入ってもらおうか、一緒に暮らしてあげないと危ないわね」などと言われることに、大きなプレッシャーを感じていました。特に長男は、母が周囲に迷惑を掛けてしまうくらいなら、何とか同居できる方法を検討すべきと主張していました。しかし、長男には障害を抱える息子がいて、長男の妻の両親と同居していますし、長女はフルタイムで仕事をしながら受験生の子供2人を抱えています。

Sさんの日課は、毎日午前中に近所の喫茶店（コメダ珈琲）に通うことでした。長女がSさんのお財布に「何かあったら連絡してください」と長女の携帯電話を記載したカードを入れておいたところ、あるときコメダ珈琲の店長から電話が掛かってきたそうです。

毎日お店に通い詰めている、明らかに認知症のSさんのことは、コメダ珈琲のアルバイト店員まで全員が認識しており、たまに来ない日があると「今日はSさんが来ていない」と皆が心配するようになっていたそうです。

電話を受けた長女も、母親がコメダ珈琲に何か迷惑を掛けてしまい「危ないし、迷惑だから、もう来ないでほしい」という趣旨の電話なのではないかと不安になったそうですが、実際にはまったくその逆でした。コメダ珈琲の店長も、「こんな電話をしたら、Sさんが娘さんから『もうコメダに行っちゃだめ』と言われてしまうのではないかと、以前はご主人と仲良くいらしていたから、Sさんの日課になっていると思うので、それが心配でお電話するのを躊躇していました」とおっしゃったそうです。

電話の内容は、ときどきお財布の中にお金が入っていないことがあるが、その日の夕方か翌日には必ず支払おうとしてくれる、その際に、お財布の中身をすべてレジ係の店員に見せて、「ほら、こんなにあるからもっと取って」とか「家に帰れば現金がたくさんある」などとおっしゃるのが、最近、強盗などが多いご時勢なので心配。それから、たまにお店の前の歩道が狭くて斜めになっていることもあり、ときどき転倒した状態で来店することがあることが心配、というご報告だったそうです。

次週も、Sさんの一人暮らしと子供たちの対応について続きをお伝えします。